

ポーエン様丘疹症の典型例である。ISH法によりHPV 16型の感染が証明された。図7に中年女性の外陰部に多発したポーエン様丘疹症の肉眼所見を提示する。ISH法ではHPV 31/33/35型のプローブカクテルに反応する異型核が少数観察された。本例は、4年後に浸潤性扁平上皮癌へ進展し、鼠径リンパ節転移をきたした。

参考文献

- 1) Lorincz, A. T., Reid, R., Jenson, A. B. et al.: Human papillomavirus infection of the cervix: Relative risk associations of 15 common anogenital types. *Obstet Gynecol* 1992, **79**: 328-337
- 2) 安本 茂: ヒトパピローマウイルスのがん遺伝子機能と細胞増殖制御機構. *細胞工学* 1995, **14**: 268-279
- 3) Tsutsumi, Y., Kawai, K., Hori, S., Osamura, R.

Y.: Ultrastructural visualization of human papillomavirus DNA in verrucous and precancerous squamous lesions. *Acta Pathol Jpn* 1991, **41**: 757-762

- 4) 堤 寛: 性感染症(STD): 顕微鏡による同定. 免疫組織化学と *in situ* hybridization 法. *臨床検査* 1996, **40**: 679-686
- 5) 堤 寛: 感染症. 細胞診と酵素抗体法(長村義之編), 武藤化学, 1997, 112-130
- 6) 谷 洋一: DNA ターゲット増幅法(PCR法)とシグナル増幅法(CSA法)の *in situ* hybridization (ISH)法への応用. *組織細胞化学* 1997(日本組織細胞化学会編), 学際企画, 東京, 1997, 174-178
- 7) 堤 寛: *in situ* hybridization 法の感染症領域における展開. *臨床検査* 1998, **42**: 969-977
- 8) 石田晋之介, 田端英之, 斉藤 浩他: 手指病変よりHPV-DNAが検出されたbowenoid papulosisの1例. *皮膚科の臨床* 1995, **37**: 1465-1469

■標本の転写

細胞診標本や外部からの持ち込み標本など、さまざまな理由により1枚しか標本がなく、しかもシランスライドが用いられていない場合、免疫染色やISH法は不可能だろうか。

この場合、標本の「転写」が有用である。まず、脱水・透徹した標本の上にMount-Quick(大道)ないしマリノール(武藤)といった樹脂性封入剤をたっぷり(2~3mmの厚さに)かけ、孵卵器で1~2日かけて固化させる。ついで、温水中に1時間ほど浸してから樹脂を剝離すると、標本は樹脂側に付着・移動する。この樹脂膜をシランスライドに水中で密着させ(気泡を除き)、再び孵卵器中で十分に乾燥させる。最後に、キシレンで脱樹脂すると標本の引っ越しが完了する。樹脂を分割すれば、1枚の標本から複数のスライドガラスへの転写が可能となる(図8)。この方法は、破損スライドガラスの修復やプラスチック板上に培養された細胞のスライドガラスへの転写などにも応用できる。

婦人科細胞診では、pap染色標本が1枚のみしかなく、免疫染色やISHを行いたいが、pap標本も残った場合が少なくない。次のチャンスにサンプリングするのも一案だが、カバーガラスの外側にはみ出た部分のみを転写するのも実用的なアイデアである(カバーガラスをはがさなくてよい利点もある)。

参考文献

- 1) 広川満良, 有安早苗, 鐵原拓雄他: マウントクイック封入剤を用いた細胞転写法の免疫組織化学

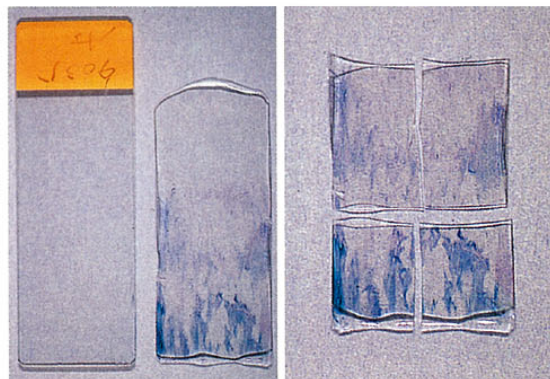


図8 細胞標本のシラン処理スライドへの「引っ越し」 細胞標本のカバーガラスをはずし、封入剤を厚くかけて固化させたのちに封入剤を温水中ではがすと、塗抹された細胞がすべて封入剤側に移動する。樹脂をはさみ等で分割し、シランスライドに載せて乾燥させたのちに、キシレンで脱樹脂を行うとISH法を含めた複数の染色が可能となる。pap染色は塩酸アルコールあるいは水中放置で脱色される。

および電子顕微鏡的検索への応用. *日本臨床細胞学会雑誌* 1995, **34**: 1236-1237, 1995

- 2) 大野綾子, 喜納勝成, 岡崎哲也他: マリノール封入剤を用いた細胞転写法. 免疫組織化学およびISH法への応用. *日本臨床細胞学会雑誌* 1996, **35**: 657-658
- 3) 川井健司, 堤 寛: スライドガラス破損の際の対策. *検査と技術* 1999, **27**: 1315-1316